

## さあどうする、朴槿恵大統領

JJ1SXA/池

以下に、「週刊文春」2015年4月2日春の特大号から引用の「そよ風ブログ」の記事を転載させていただきます。

朝鮮戦争当時の、米軍向けの慰安婦たちの訴訟はどうなっているのか知らないが、この記事で「もし韓国政府がこの問題を黙殺したり、調査もせず否定したりするなら、彼らこそ都合の悪い事実に向き、歴史を直視しない国家である事を、国際社会に対して自ら証明する事になる。」と指摘していますが、韓国政府や朴槿恵大統領はどのように対応するのだろうか？

まさか、とんでもない話だとして訴訟を起こすようなことはあるまいと思うが、あの国のこと、そんな「まさか」も無いとは言えないが…

「週間文春」、「そよ風ブログ」をご覧になっていない方にぜひ読んでいただきたく、以下に、「そよ風ブログ」の記事全文を転載させていただきます。

…転載記事全文…

### 韓国軍にベトナム人慰安婦がいた!

米機密公文書が暴く朴槿恵の“急所”

(TBSワシントン支局長・山口敬之)

三月二十一日、ソウル。

三年ぶりの日中韓外相会談が行われたが、日韓間で慰安婦問題の議論は平行線を辿った。

だがもし韓国軍が同様の行為を行っていたら――。

米公文書館での徹底調査とベトナム現地取材で初めて明らかになるベトナム戦争下での韓国軍の真実。

最初に、TBSでワシントン支局長を務めている私が、なぜベトナム戦争当時の韓国軍について取材を始めたのかを記しておきたい。

きっかけは、アメリカに赴任する直前の二〇一三年初夏、ある外交関係者から聞いた言葉だった。

日韓関係に長らく関わり、野党時代の朴槿恵氏と食事をしたこともある人物だ。「朴大統領は就任早々、慰安婦問題で出口のない迷路に入り込んでしまった」

その年の二月に第十八代大統領に就任した朴槿恵氏は、早くも慰安婦問題で日本に強硬な姿勢で臨む方針を明確にしていた。韓国では〇四年に、植民地時代に日本に協力した者を糾弾する「親日・反民族行為真相究明特別法」が成立している。

植民地時代、日本軍の将校だった朴正熙元大統領を父に持つ朴大統領は、この法

律によって大いに苦しめられてきた。

「父の親日イメージを断ち切るかのように、日本批判を続ける事が彼女のレゾナードルとなってしまった。

そして、慰安婦問題が朴大統領自らの反日姿勢を証明するツールとなった以上、彼女が自分からこの問題を解決するという選択肢はなくなった。

もはや慰安婦問題は韓国の内政問題となってしまったのだ」それでは、慰安婦問題を巡る日韓の軋轢に出口はないのだろうか？ 私の問いに、彼はこう答えた。「もしかしたら、あなたがこれから赴任するアメリカに解決のヒントがあるかもしれない」

日韓両国から遠く離れたアメリカに、何があるというのか。

「実は、ベトナム戦争当時、韓国軍が南ベトナム各地で慰安所を経営していたという未確認の情報がある。

これをアメリカ政府の資料等によって裏付ける事ができれば、慰安婦問題において韓国に『加害者』の側面が加わる事になる。

それをきっかけに、朴大統領と韓国国民が頭を冷やし、真摯に慰安婦問題に向き合うようになれば、事態は変わるかもしれない」

日韓関係の現状を憂うこの人物に背中を押され、ワシントン赴任早々の一三年九月から、私の全米各地に眠る公文書を探す取材が始まった。

＊

アメリカには、国立公文書記録管理局、通称「NARA」と呼ばれる組織がある。

政府の公文書や歴史的価値が高いと判断された各種資料を保管する米政府の公式機関で、全米三十三カ所に公文書管理施設を持ち、四十億枚の紙、三十万本の映像、五百万枚の地図や統計資料などを保管・公開する世界最大の公文書管理組織だ。

ベトナム戦争についても、南北の内戦突入(一九六〇年)から米軍全面撤退(七三年)に至る、膨大な公文書や映像資料が保管されている。

六〇年代に本格化したベトナム戦争は、ソ連や中国など共産主義陣営が支援する北ベトナム側と、アメリカや台湾など自由主義陣営が支援する南ベトナム側が戦った事から「冷戦米ソの代理戦争」と呼ばれた。

五〇年代前半の朝鮮戦争で国土が荒れ果て、世界の最貧国レベルにまで落ち込んでいた韓国。六三年に第五代大統領となった朴正熙は、ベトナム戦争を復興に向けた千載一遇のチャンスと位置づけた。

粘り強い交渉の結果、アメリカ政府から派兵規模に応じた補助金支給と、対米移民枠の設定を勝ち取り、六五年から本格的に韓国軍を投入。

南側では米軍に次ぐ勢力となる延べ三十一万人の韓国兵がベトナムに渡った。

ベトナム戦争時の韓国軍に関する公文書は全米各地に点在している。

私は、ワシントン支局長としての日々の業務の合間を縫って、ワシントン市内や郊外メリーランド州の公文書館、さらに各地の米軍基地付属の図書館や資料館を訪れたり、リサーチャーを派遣したりして、関連の文書を大量にコピーし、支局に持ち帰っては読み込む作業を続けた。

ジョン・F・ケネディ大統領(六一～六三年)やリンドン・B・ジョンソン大統領(六三～六九年)、ロバート・マクナマラ国防長官(六一～六八年)など当時のキーマンの書簡から、各国の外交官や軍関係者のメモまで、ありとあらゆる階層の様々なやり取りを記録した公文書からは、教科書や歴史書からは伝わらない、当時の生々しい息遣いが感じられた。

最初に集中的に読み込んだのは、ホワイトハウスや国務省等の外交文書だ。

そこから判明したのは、当時のアメリカ政府がベトナムにおける韓国兵の行状に、相手を焼いていたという事だった。

韓国兵の蛮行の記録は、本格派兵直後の六五年から始まっていた。

戦地での市民の虐殺、強姦から、サイゴンなどの都市部での為替偽造、物資の横流し、麻薬密売に至るまで、ありとあらゆる犯罪記録が大量に残されていた。

米軍司令部は韓国軍司令部に対して繰り返し書簡を送り、違反者の訴追と再発防止を求めたが事態は悪化の一途をたどった。

七〇年には、アメリカ連邦議会下院の外交委員会で、韓国軍による残虐行為を追及する特別調査チームが作られる事態にまで発展した。

ただ、これら外交文書の多くは虐殺や経済犯罪などに関するもので、韓国軍の慰安所に関するものはなかなか出てこなかった。

そこで、私はリサーチの目先を変えてみた。

韓国兵の悪行が問題になっていたなら、犯罪や裁判の記録の中に何らかの手がかりがあるのではないかと考えて、一四年の春から、ベトナム駐留米軍の軍政部と軍警察の犯罪記録に手を伸ばし、年代順にコピーして片っ端から読み始めた。

そこには、外交文書よりもさらに生々しい強姦、暴行、窃盗、傷害、軍需物資の不正取得など、夥しい数の韓国兵の犯罪が様々な形で記録されていた。

### サイゴンの「韓国軍慰安所」

そして七月二十五日深夜。

誰もいない支局の小部屋で、いつものように犯罪記録の公文書を一枚一枚剥ぐように読み込んでいると、一通の書簡に行き当たった。

その書簡は、サイゴン(現ホーチミン市)のアメリカ軍司令部から、同じくサイゴンの韓国軍司令部に送られたものだった。

宛先は、ベトナム駐留韓国軍最高司令官・蔡命新(チェ・ミュンシン)将軍だ。

この書簡には日付の記載がなかったが、年代順に整理された他の公文書や記載内容を基にした関連取材で、六九年一月から四月の間に書かれたものと推定された。

書簡の主題は、韓国兵が関与した経済事件に関するもので、不正な通貨を用いて米軍の軍需物資が大量に横流しされていると指摘されていた。

その一連の犯罪行為の舞台のうちの 하나가、サイゴン市中心部にあったという「The Turkish Bath」(トルコ風呂)だ。

この「トルコ風呂」について書簡は、「売春行為が行われていて、ベトナム人女性が働かされている」と説明している。

そして、主題である通貨不正事件の捜査のために、米軍とベトナム通関当局が共同で家宅捜索を行って、その結果を、次のように記していた。

「この施設は、韓国軍による、韓国兵専用の慰安所(Welfare Center)である」(The Turkish Bath was a Republic of Korea Army Welfare Center for the sole benefit of Korean Troops.)

驚いて何度も読み返したが、米軍司令部がこの施設を「韓国軍の韓国兵のための慰安所」とであると捜査に基づいて断定している。

そして、米軍司令部は韓国軍の慰安所と指摘するにあたって、二つの根拠を示していた。

まず、押収資料の中から、韓国兵の福利厚生を担当する特務部次長の任にあった韓国軍大佐の署名入りの書類が見つかり、その書類に韓国軍による韓国兵専用の慰安所であると示されている事。

さらに、家宅捜索でこの施設から押収された物資について、韓国軍幹部がベトナム税関当局に対し返還を求める書類を提出した事実を、対して、経済犯罪に関わった疑いのある大佐や中佐など、韓国兵六名の実名を通報した。

友軍の司令官に部下の犯罪行為を指摘する書簡だけに、その文章は捜査と証拠に基づいていて隙がない。

今回、米国の公文書によって初めてその存在が明らかになった、サイゴンの「韓国軍慰安所」とは、一体どのように運営されていたのだろうか。

すぐにでもベトナムに飛んで現地取材をしたかったが、ワシントン支局長という立場上長期間アメリカを離れる事は難しい。

そこで私は当時のサイゴンの風俗事情に詳しい人間がアメリカにいないか、そしてできれば問題の施設そのものを知る人物がいないか改めてリサーチを開始した。

まず、当時の米軍関係者とベトナム系アメリカ人に照準を絞って、アメリカにおけるベトナム関連のネットワークを探した。

関連のフォーラムに出席したり、米政府の退役軍人省のデータベースを調べたりして、

連絡先の判明した関係者に虱つぶしに手紙やEメールを送った。

また、サイゴンに住んだ経験のある人の証言を得る為、ワシントン郊外バージニア州のベトナム人集住地区の新聞に情報提供を求める広告を出した。

すると、ほどなくして広告を見たアメリカ人からEメールが来た。

ハンス・イクス氏(70)。

六〇年代後半にアメリカの通信インフラ会社からサイゴンに派遣され、その後数年間にわたってベトナムとアメリカを往復したというイクス氏は、今はバージニア州東部で年金生活を送っている。

若くして訪れたサイゴンは印象が強烈だったという事で、当時の街の様子を饒舌に語ってくれた。

しかし、トルコ風呂について質問が及ぶと、周りを憚るように声を潜めた。

「『トルコ風呂』は、当時サイゴンにいた人の中では、『射精パーラー』(Steam and Cream Parlor)と呼ばれていました。

若いベトナム人女性から性的サービスを受けることが出来たからです」

別のサイゴン駐在経験のある米軍OBは、匿名を条件に次のように証言した。

「トルコ風呂で働いているのはほとんどが二十歳未満の農村部出身の少女だった。

十六歳だと語る人もいたし、もっと若く見える女の子もいた。

素朴で華奢な少女達に夢中になる兵士も多く、彼らは周りからYellow Fever(黄熱病)と揶揄されていた」こうした証言を通じて、当時サイゴンのトルコ風呂が、かつての日本と同じく売春施設の別称であった事は明らかになってきたが、問題の韓国軍の慰安所そのものを知っている人物にはなかなか辿り着けなかった。

そして、作業を続けて半年程経った頃、ベトナム戦争を戦った経験のある米軍OBからEメールが送られてきた。

アンドリュー・フィンライソン氏(71)。

米海兵隊の歩兵部隊長として六七年から二年八カ月に渡ってベトナム戦争を戦い、サイゴンをはじめ南ベトナム各地を転戦。

退役後は紛争地域の軍事顧問団として活躍し、ベトナム戦争に関する著作も発表している研究者だ。

早速インタビューを申し込むと、快く応じてくれた。

## 「休息と回復期間」の兵士

朝晩の冷え込みが厳しくなってきた昨年初冬、アメリカ東海岸バージニア州の小さなホテルに現れたフィンライソン氏は、黒いタートルにジャケットを着た、温厚な容貌の紳士だった。

だが、衣服越しにも明らかな分厚い胸板と鋭い眼光が、元海兵隊幹部という肩書きを

裏付けていた。

「韓国軍の慰安所は、確かにサイゴンにありました。

よく知っています」その体躯とはうらはらに、フィンライソン氏の語り口は、研究者だけあってあくまで知的で静かだった。

南ベトナム各地の農村の偵察部隊の責任者として、韓国軍との連絡調整に従事した経験があり、韓国軍の実情に詳しかった。

「米軍司令官が指摘している韓国の慰安所とは、韓国軍の兵士に奉仕するための大きな性的施設です。

韓国兵士にセックスを提供するための施設です。それ以外の何ものでもありません」フィンライソン氏によれば、問題の施設は、トルコ風呂としてはかなり大規模なものだったという。

その後の取材で、施設が入っていた建物が今なお現地に存在する事が確認され、問題の施設が隣接する二つのビルを合わせて一つの施設として一体的に運営されていた事や、通りの向かい側にも別棟があるなど相当な規模で運営されていた事がわかった。

しかし、フィンライソン氏によれば、サイゴン市内の別の場所には、これよりもさらに大きい慰安所があったという。

これらの施設は、内部が多くブロックに分かれていて、一区画に二十人前後のベトナム人女性が働かされていたという。

韓国軍が、なぜサイゴン市内に大規模な慰安所を作らなければならなかったのかを尋ねると、フィンライソン氏は即座にこう答えた。

「韓国兵がベトナム人女性をレイプしたり、個別に性的関係を持ったりするのを防ぎたかったからです。

また、韓国軍将校が農村で女性を売春婦として困う恐れもあり、こうした行為はベトナム社会と韓国兵の間で政治的トラブルに発展する危険性がありました」「また軍にとっては性病も重大な懸念でした。

慰安所ならば慰安婦の健康を管理できます。

当時南ベトナムでは性病が深刻な問題になっていて、特に梅毒が蔓延していました」ベトナム戦争当時、一定期間前線で戦った韓国軍の兵士は、「休息と回復期間 (Rest & Recuperation)」として戦地を離れ、サイゴンで休養する事を許された。

この「静養中」の韓国兵がサイゴンや近郊の農村でトラブルを起こしたり、性病に罹ったりしないよう、韓国軍が韓国兵のための慰安所を、サイゴン市内に設置したというのだ。

では韓国兵士の相手をさせられたベトナム人の慰安婦とは、どんな女性たちだったのか。

フィンライソン氏は、そのほとんどがベトナム各地の農村出身の少女だったと証言した。

「こうした売春施設で働いている女性はほぼ例外なく農村部出身のきわめて若い女性でした。

彼女達が施設に来た理由は様々です。

貧困のために家族に売られてきた少女もいたし、自らの意思で来た女性もいた。

彼女たちは、職を失って慰安婦となった。

騙されて連れてこられた女性も当然いたでしょう」

先の書簡には、この施設は韓国兵専用の慰安所として設立されたが、米軍など友軍の兵士も特別に利用する事ができ、その場合は一回につき三十八ドルが請求されたと書かれている。

韓国軍の慰安所が友軍の兵士を受け入れるようになった経緯については、フィンライソン氏はこう説明した。

### 韓国の国家としての意思

『『休息期間』でサイゴンに滞在する韓国兵の数は時期や季節によってばらつきがありました。

このため、そもそもは韓国兵専用として設立された施設ですが、韓国兵の数が少ない時期に、友軍の兵士も受け入れるようになっていったのです」

私が投げかけるあらゆる質問に対して、フィンライソン氏の答えは簡潔かつ明快だった。

そしてその解説は、それまでに読み込んだ公文書の内容や関係者からの聞き取りと、ぴったりと一致していた。

フィンライソン氏への一時間半に渡るインタビューを終え、私は一年三カ月に及んだこの取材を通じて抱えていたいくつかの疑問が氷解していくのを感じた。

もちろん、韓国軍による慰安所設置の経緯、規模、運営実態など、今後解明されなければならない事は多い。

しかしベトナム戦争当時のサイゴンに「都市型慰安所」とでもいうべき、これまで知られていなかった韓国軍の施設が存在したという点については、もはや疑いがなかった。

＊

では、韓国軍の慰安所運営について、ベトナムの人々はどう受け止めるのだろうか。

南ベトナム政府の元官僚で現在はワシントン郊外に住むグエン・ゴック・ビック博士に話を聞く事ができた。

ビック博士とは、昨年夏ワシントンで開かれたベトナム戦争五十周年の記念フォーラムで出会った。

中部の港湾都市ダナンで生まれサイゴンで育ったビック博士は、ベトナム戦争が本格化する直前の五八年にアメリカに渡り、コロンビア大学や京都大学などに留学した後、複数のアメリカの大学で教鞭をとったアジア文学の研究者だ。

ベトナム戦争時の韓国軍による虐殺などの蛮行については詳しく知っていたが、慰安所の事は知らなかったという。

ビック博士は小柄で白髪の温厚な紳士だが、問題の書簡を読んでもらうと見る見る顔つきが厳しくなった。

「犯罪や酷い行為が行われたのなら、それは日本人だろうが韓国人だろうがベトナム人だろうがアメリカ人だろうが、悪いものは悪いのです」

アメリカ在住のベトナム人団体の議長も務めるビック博士は、ベトナム人について「二千年前の出来事でも昨日のこのように話す民族」であるという。

「韓国軍がベトナム人に対して酷い事をしたのであれば、ベトナム人はうやむやにすることは絶対にできません」

「我々は良心に従って韓国と向き合い、調査し、交渉をして、白黒はっきりつけなければならぬ。

真実が分からない限り、いつまでも問題は解決しないし、国家間の関係を害することになる」

ビック博士が最も強調したのが、慰安所設置に踏み切った、韓国の国家としての意思だ。

「一部の不良がやっていた違法行為でなく、韓国政府が政策としてやっていたのなら、看過されるべきではない。

国家が関与したのであれば、決して正当化する事はできないのです」

「軍の規律維持」と「性病防止」のために、韓国政府と韓国軍が組織的に慰安所を設置、運営したのであれば、そこには明白な国家の意思が存在することになる。

そしてその構図は、韓国政府が繰り返し厳しく批判する日本軍の慰安所と全く同じだ。

だがそれもそのはず、当時の大統領・朴正熙は、日本の陸軍士官学校を卒業し、太平洋戦争では日本軍兵士として満州各地を転戦した経歴を持つ。

それだけに、日本軍の慰安所の仕組みと機能を熟知していた。

また、問題の書簡を受け取った蔡命新司令官は、六一年に朴正熙がクーデターを起こした直後に幹部に抜擢した、腹心中の腹心だ。

蔡命新は、九四年に執筆した自叙伝『死線幾たび』の中で、朝鮮戦争当時韓国軍が慰安所を運営していた事実を認めている。

朝鮮戦争休戦後、わずか十年余でベトナム戦争に参戦した韓国軍が、ベトナムでも慰安所を運営するのはごく自然な成り行きだっただろう。



朴正熙と蔡命新という政軍両トップの存在があったからこそ、ベトナム戦争でも韓国軍が慰安所運営に踏み切ったともいえる。

一方、朴正熙の娘である朴槿恵大統領は、私の渡米後も、日本軍の慰安所について国際社会で厳しく糾弾し続けた。

昨秋の国連総会では、世界に向けてこう演説した。

「戦時の女性に対する性暴力は、時代、地域を問わず、明らかに人権と人道主義に反する行為だ」

ベトナムに韓国軍の慰安所が存在したことがアメリカの公文書によって明らかになった今、朴槿恵大統領は自ら発した言葉に自ら応える義務を負った。

彼女が慰安婦問題を、反日を煽る内政や外交のツールではなく、真に人権問題として捉えているのであれば、サイゴンで韓国兵の相手をさせられたベトナムの少女に思いを致すだろう。

何人の少女が、どのような経緯で慰安婦にされたのか。

意に反して慰安婦になる事を強いられた女性はいなかったのか。

どんな環境で働かされたのかなど、率先して調査するだろう。

韓国の元慰安婦に対して行ったのと同じように。

そして、韓国軍慰安所と日本軍慰安所は、どこが同じでどこが異なっていたのか調査し、それぞれの慰安所の何が問題で何が問題でないのか検証するだろう。

こうした公正な姿勢によってのみ、日韓両国の慰安婦問題が整理され、両国が真の和解に向かう礎が生まれると私は信じる。

しかし、もし韓国政府がこの問題を黙殺したり、調査もせず否定したりするなら、彼らこそ都合の悪い事実を背向け、歴史を直視しない国家である事を、国際社会に対して自ら証明する事になる。

…転載終り…

結構長文ですが、お読みいただきありがとうございました、以後の経緯を見守りましょう、韓国の未来を左右しかねない大問題だと思います。

朴大統領はベトナムを訪れた時、ベトナム戦争中に南ベトナムに派兵された、韓国兵が犯した婦女暴行や住民虐殺への謝罪は一切していない。

「過去を直視する勇気と相手の痛みに対する配慮がなければ未来を開く信頼を重ねていくことは厳しい」などと抜け抜けと言い放っているが、行動は伴っていない、民主主義国家としての常識に欠ける大統領と国のこと、他国は責めるが自国のことには無反省、これを貫くのか？

(29,Mar,2015 記)